音読・朗読を楽しむ生徒を育てる

石 川 直 美

1　はじめに

平成元年の学習指導要領から，音声言語指導について一層の充実が図られるようになった。「A　表現」には朗読，話すこと，話し合いの三項目について，指導事項が掲げられている。ここでは，この音声言語指導の中の音読・朗読の指導について考えていきたい。

朗読については，学習指導要領に，「文章を音声化することによって，更に理解を深めたり，表現する喜びを味わったりすることについての指導事項」（中学校指導書　文部省）として，学年ごとに次のような指導事項が示されている。

第１学年　　ク　文章の内容や特徴がよくわかるように朗読すること。

第２学年　　ク　文章の内容や特徴に応じた読み方を工夫して朗読すること。

第３学年　　キ　文章の内容や特徴を生かして効果的に朗読すること。

また，「言語事項」においては，音声言語全般にかかわることとして，発音，発声についての指導事項が次のように示されている。

第１学年　　ア　話す速度や音声，言葉の使い方などに注意すること。

第２学年　　ア　言葉の調子や間のとり方などに注意すること。

これらは，朗読の際の，音量，速度，調子，間のとり方などにも共通するものであろう。

生徒が音声言語を楽しむ機会を積極的に作りだし、また，それによって日本語の美しい響きを感じ取らせることができるような指導を工夫していきたい。

2　教科書における音読・朗読の扱い

教科書において，音読朗読はどのように扱われているであろうか。このことについて，平成９年度から使用される教科書について見ていく。

まず，音読・朗読を学習の中心においている教材，また，朗読の留意点などを扱った教材（コラム）を挙げる。参考にしたのは，各教科書の巻頭あるいは巻末に収められている学習のめあてや，各教材のあとに置かれた学習の手引きなどである。

＜光村図書＞

・第１学年　第１単元　　第１教材　詩「野原はうたう」　工藤直子

これは，朗読のための教材として配置されているものである。平成５年版からの継続であるが，新版では朗読を誘(いざな)う文章が詩の前に載せられている。この教材のあとに「朗読――楽しく，のびのびと」というコラムがあり，朗読の留意点として，「よい姿勢で」「強弱や速さに気をつけて」「間のとり方を工夫して」の３点が，解説とともに挙げられている。中学校の国語開きとして，作品との出会いを朗読を楽しむことにおき，さらに，朗読の基本を押さえるよう配慮されている。

＜教育出版＞

・第１学年　第１単元　　第１教材　詩「河童と蛙」　草野心平

詩の面白さを群読で表現する学習である。これまでも取り上げられていた教材であるが，新年度版では，群読

の学習について，平成５年度版までの教科書より詳しく扱っている。

また，第２学年第１単元の詩「春でぇむん」（照屋林賢）「麗月」（一戸謙三）の学習の手引きには，「自分たちの郷土の詩を探して朗読しよう」と指示されている。

＜東京書籍＞

・第１学年　第１単元　　第１教材　詩「見えないだけ　年若い友へ」　牟礼慶子

音読を中心的な学習としている教材である。第３教材に，「話し方はどうかな」（川上祐之）があり、聞き手によくわかる話し方について具体的に述べているが，これは，音読・朗読にも通じる内容である。この教材の後に，「声に出して読んでみよう」という指示で，詩「はる」（畑中圭一）が載せられている。

・第１学年　表現２　身近な生活体験を書く

生活体験を書くという表現活動の最後に，朗読発表会を設定している。「書いたものを発表するには，どこに気をつければよいだろう」として，出来上がった作文に朗読の留意点を注記したものを提示している。さらに，朗読するときの心得として，「みんなのほうを向く」「会場全体のみんなに聞こえるように話す」「正確な発音で話す」「適切な速度で話す」「言葉の調子や間のとり方を工夫する」の５点が挙げられている。

第２学年，第３学年も，第１単元には詩が置かれている。「学習のめあて」によると理解学習が中心であるが朗読も取り入れられている。

＜三省堂＞

・第１学年　第１単元　　第１教材　詩「めがさめた」　工藤直子

「めがさめた」は，朗読のための教材として配置されている。このあとに物語文「竜」（今江祥智）があり，続いて，コラム「音声」の「読み方をくふうして」がある。このコラムでは，二つの教材の読み方の工夫について具体的に説明し，「聞き手を意識しながら，声の大きさや速さ，また，その変化に気をつけて，声の表現を楽しみましょう」と結んでいる。平成５年度版も第１教材は詩であったが，新版の方が朗読教材としての扱いが全面に出ている。

・第２学年　第１単元　　第１教材　詩「ジーンズ」　高橋順子

第１学年の場合と同様，朗読を中心とする教材である。

また，古典教材のあとに，第２学年はコラム「美しい響きで」を設けて群読を扱い，第３学年はコラム「漢文の朗読」を設け，漢文のリズムの美しさを楽しむよう勧めている。

＜学校図書＞

・第１学年　表現４　古典を朗読する

古典教材のあとに，表現活動として朗読の学習活動を組み，「文字を正確に読む」「文の仕組みを考えて意味をとらえ，間のとり方を工夫する」「会話文の読み方を工夫する」「調子を変える」の４点をあげている。この中の「調子を変える」は，文体や内容によって，強さ・高さ・速さなどを変えることを意味している。

・第２学年　表現４　古典を群読する

第１学年と同じく，古典教材のあとに，表現活動として群読の学習活動を組み入れ，具体的な群読の案を示しながら読みを深めるような学習としている。

以上が，音読・朗読を学習の中心にした教材，あるいは、それに関するコラムである。第１学年，第２学年では，学年の冒頭の教材に詩を置き，朗読を中心とした学習を展開する形が多いことがわかる。平成５年版の教科書と比較しても，この傾向が強い。

このように，音読・朗読を学習の中心にしたもの以外でも，詩，短歌，俳句あるいは古典においては，音読が重視されているのは言うまでもない。また，文学的文章においても，理解学習の学習過程の中に組み込まれていることももちろんである。学習の手引きには，次のような形で，音読・朗読の学習が指示されている。

・「この作品の表現のおもしろさを味わいながら朗読しよう」（教育出版　第１学年「オツベルと象」）
・「作品の味わいを生かして，朗読を工夫しよう」（教育出版　第２学年「夏の葬列」）
・「次のことに注意しながら，グループで分担して，朗読しましょう。　・登場人物の気持ち，情景，会話の調子　・間，スピード」（東京書籍　第２学年「形」）
・「この小説は，語り口調で書かれている。この調子を生かして朗読してみよう」（学校図書　第２学年「走れメロス」）
・「この文章を，次の点に注意しながら朗読してみよう。①文吉，おふじ，ぬすっと，役人のそれぞれの人物像がよくわかるように，会話の部分を工夫して読もう。　②地の文を読む人，それぞれの人物の会話の部分を読む人，というふうに役割を決めて朗読しよう」（学校図書　第１学年「ぬすびと面」）
・「２８ページ１３行目から終わりまでを，地の文を読む人と，正一，父親，母親，おばあさんの役になる人に分かれて，朗読してみよう」（光村図書　第２学年「六月の蠅取り紙」）
・「登場人物の心情の変化に注意しながら，印象に残った部分を朗読しましょう」（東京書籍　第３学年「いちご同盟」）
・「最も心に残っている場面を選び，朗読しよう」（三省堂　第２学年「走れメロス」）

このような形で，学習展開の中に朗読を組み込みながら，あるときは学習のまとめとして，あるときは読解の手立てとして，理解と表現を関連させた学習を進めるよう示されている。

3　単元設定の理由

教科書において，音読・朗読のための教材を扱ったり，あるいは，理解教材の学習過程で朗読を取り入れたりしていることは，前項に示したとおりである。しかし，これらの学習をより効果的にするために，音読することそのものを楽しむ活動を日常的・継続的に組み込むとしたら，どのような学習を考えられるであろうか。とくに，詩教材については，学年の冒頭の教材では朗読を中心に学習を展開しても，その他の詩教材では，ややもすると理解学習が中心になりがちである。もっと，声に出すことそのものを楽しむ詩を授業の中に取り入れることにより，日本語のもつ響きのよさやリズムを感じさせる機会を増やすことが必要ではないだろうか。この課題について，

・声に出して読むことを楽しませること
・継続的に学習させること

の２つを重点に，帯単元的な学習を試みることにした。

4　単元のねらい

音読・朗読は，理解活動と密接に結びついたものであり，文章の理解が読みに表れると同時に，朗読により文章の理解が深まることは言うまでもない。さらに，このことと同時に大切にしたいのは，文章を音声化することにより，日本語の美しい響きを感じ取らせるということである。これについては「１　はじめに」にもふれたとおりである。これらのことから，単元のねらいを，次の３点におくことにした。

①　音声言語の楽しさを味わうことができる。
②　音読により，日本語の響きの美しさを感じ取ることができる。
③　文章の内容にあった読みを工夫することができる。

この①②については，「３　単元設定の理由」でも述べたように，教科書の冒頭の詩教材や古典教材の朗読の面白さを，年間の学習の中にもっと取り入れることをねらいとし，年間を通した単元として設定した。できるだけ多く音読の機会を作り，声を出すこと，全員で声を合わせることを楽しむとともに，日本語のリズムや響きの

よさを実感させたいと考えたからである。また，③については，生徒同士の相互交流を取り入れた学習を試みたいと考えた。

5　指導の実際

単元のねらいにしたがって，次のような二つの学習指導を試みた。

1　声を出そう
2　朗読テープを作ろう

以下に，それぞれの指導の実際，および生徒の様子について詳しく述べていく。

1　声を出そう

1　学習の方法

音読を楽しむ活動を継続的に取り入れる試みとして，毎時間の始めの２～３分を利用して詩の音読をさせる学習である。年間を通して行うため，帯単元といった形をとることなる。

１編の詩を，１回目は読み慣れる，２回目からは読みの工夫や暗唱をしながらといった形で，音読していく。全員で声を合わせることを楽しむことに重点を置き（単元のねらい①），文語調の定型詩や古典作品も取り入れることにより，日本語の持つリズムや響きのよさを感じ取らせていく（単元のねらい②）。声を出すことが目的であるので，原則として，内容については読みに関係のあるもの以外はふれないことにした。

この試みは，１年次から３年次までの３年間を通して実践し，今また２回目の実践に入っているところである。

2　教材と指導の方法

３年間の流れの中で，どのような作品を扱ってきたかをまとめてみる。

(1)　１年生１学期の単元入門ともいうべき時期には，全員の声を合わせることになれると同時に，声を出すことそのものを楽しむことのできる詩を扱った。姿勢を整え，口をはっきり開けて明瞭な発音をすることを心がけながら読むよう指導した。

＜例＞

・「であるとあるで」　谷川俊太郎　（資料１）

「である」「でない」の言葉を組み合わせた詩。明確な発音を指導するのに適している。言葉遊びの詩であるため，生徒の興味を引いた。２回の実践でいずれも最初に扱っている。

・「かっぱ」　谷川俊太郎

この詩は知っている生徒が多いので，すぐ声に出して読み始める。教室を２分し，一方の生徒は詩をそのまま音読し，もう一方の生徒は「かっぱ」という語を繰り返すという方法で音読させ，声を合わせることのおもしろさを味わわせた。

・「滝桜」　草野心平

・「雲雀」　草野心平

・「竹」　草野心平　　など

(2) 声をそろえることになれてきたところで，グループに分かれて読んだり役割り読みをしたりするなどの工夫をしながら，音読を楽しむ詩を扱った。生徒から出たアイディアを生かしていろいろな読みをしながら，1編の詩を何回かにわたって扱う。このころになると，授業の始めに「声を出そう」と題するプリントを配ると，それぞれで声を出して読み始めるようになっている。

＜例＞

・「かえるのうたのおけいこ」　草野心平

登場するかえる「ぐりま」，その他大勢のかえる，地の文と，役割を分けて読む。全員で声を合わせる部分とひとりの読み声の部分があり，その掛け合いの緊張感がある。「ぐりま」役を交代し，何回かにわたって扱った。

・「お祭り」　北原白秋

2回目の実践の時に初めて扱ったが，時間の関係で第2連までにした。1年生が互いに慣れてきたところでもあるため，グループで話し合いをしながら音読に取り組ませるたいという意図で，授業の始めの音読から発展させて2時間を当て，グループごとに練習そして音読発表会へと進めた。グループによってさまざまな読み方があり，聴くことも楽しむと同時に，その工夫を生徒同士で学び合うことができた。

・「古い寓話」　草野心平

・「河童と蛙」　草野心平　　など

(3) 毎時間の始めに音読をすることが定着してきたころから，ときどき暗唱を取り入れていった。新しい詩との出会いの時は全員で声を合わせて読み，2回目から暗唱に入る。短い詩は1回で暗唱させるが，長い詩は，1回に1連ずつ，何回かにわたって暗唱させる。場合によっては，教室を2分し，一方は暗唱，もう一方は詩を見ながらといった形をとることもある。初めは，暗唱というとたいへんなことのように思っている生徒も，短時間で覚えられることがわかると，暗唱への抵抗が少なくなる。また，全員で声を合わせるため，あまり負担も感じないようであった。

日本語のリズムや響きの美しさを感じとらせるため，文語調の定型詩を扱ったが，1年生でも取り組みやすかった。

＜例＞

・「ごあいさつ」　谷川俊太郎

内容の面白さとリズムのよさで，楽しく暗唱できる。

・「私と小鳥と鈴と」　金子みすゞ

「この詩は好きで，暗唱しています」という女子生徒の言葉に，それではと，全員で取り組んだ。リズムのよさと，第1連・第2連が同じ形式であることで，暗唱しやすい。

・「われは草なり」　高見　順　（資料2）

1年生にとっては初めての文語調の定型詩であったが，小学校の教材としても扱われているものであり，抵抗なく受け入れられた。4連からなるため，4回に分けて暗唱させた。1回目の実践のときは毎時間の始めに数人ずつ暗唱させたためか，生徒の印象に残り，3年生になってからも，この詩が話題に出ることがあった。

・「少年の日」　佐藤春男

・「海辺の恋」　佐藤春男

・「雪」　三好達治

・「桃の花さく」三好達治

・「小景異情　その二」　室生犀星
・「山のあなた」　カール・ブッセ
・「初恋」　島崎藤村　　など

3　教科書単元との関連

この「声を出そう」は年間を通して行う単元として設定したものであるが，教科書教材との関連も図るため古典教材の音読を単元の中に位置づけた。例えば『平家物語』の学習においては，冒頭部分をこの「声を出そう」にとり入れ，暗唱へと導いた。また，漢詩の導入にもこの「声を出そう」の音読を利用した。1年次から暗唱になれているため，古典の暗唱にも抵抗なく取り組むことができた。

4　生徒の実態

1回目，2回目の実践とも，授業の始めには詩を音読するという形が定着し，プリントを配布するとすぐ声に出して読み始めるようになった。音読を楽しむ詩は主に1年次に扱い，2年次からは定型詩でリズムや響きのよさを味わわせることに重点を置いた。そのためか，2年次になると，指示がなくても全体で声を合わせながら暗唱をしようとする生徒がでるようになった。

3年間の学習を終えた生徒の感想には，次のようなものがある。

・何にしてもいろいろな詩を知っていることはとてもすばらしいと思う。しかも，声に出すことでリズムがわかるのでよいと思う。
・自分は暗唱について苦手で出来ないと思っていたら，案外簡単に覚えることができたのがすごかった。
・たくさんの詩にふれることができて，いま考えればとてもいい経験になったと思います。中でも，とてもシンプルだった「太郎を眠らせ，太郎の屋根に雪ふりつむ。……」というのが印象的でした。
・声をだして読んだせいか，昔のことでもずいぶん記憶に残っている詩が多いからよかった。
・定型詩がおもしろかった。いちばん印象に残っているのが，「山のあなた」と「絶句」です。

2　朗読テープを作ろう

1　学習の方法

夏休みの課題として，朗読を吹き込んだテープを作らせた。事前指導として，1学期の理解学習の中にグループによる朗読の学習を組み込み，朗読の留意事項として，声の強弱，緩急，間のとり方の工夫などを指導した。それをもとに，文章の内容にあった読みを各自で工夫する学習へと発展させたものである。（単元のねらい③）また，この学習は，出来上がったテープを交換して聴くことによる，相互交流，学び合いも目指している。

2　教材

『朝ごとの花束』　立原えりか　　講談社文庫

3　指導の実際

朗読テープの作成は次のような手順で行わせた。

①　16編の童話から2編を選ぶ。

『朝ごとの花束』には，見開きに１編という形式で，６５０～７００字の短編童話が８３話収められている。ラジオで放送されたものであるため，声を出して読むものとして適している。１回目の実践では，全員にこの本を買い求めさせ，全編を音読した後２編を選ぶよう指示した。しかし２回目の実践の時はすでに絶版となっていため，１回目の実践で人気の高かった作品を中心に，指導者の側で１６編を選び，プリントにして配布した。中から２編を選ばせた。

② 朗読台本を作る

プリントの文章に朗読のための記号を記入し，朗読台本を作る。朗読のための記号は，強弱，緩急，間など，各自で決め，記号の意味を欄外に記入することとした。（資料３）

③ 朗読台本にしたがって練習する

１編の朗読にかける時間は２分以上とした。これは，全体にゆったりと読ませるためと，間のとり方を工夫させるためである。朗読にかかった時間は，台本の最後に記入させた。

④ １０分のテープに２編を録音する

出来上がったテープを互いに聞き合うことを予定しているため，再生に都合のよい１０分テーを用いるよう指示した。ラジオ番組風に，初めと終わりに音楽を流すなどの工夫をしてもよいが，朗読を主体とするため，ＢＧＭを流すのはあまり好ましくないとした。

続いての学習として，９月から１０月半ばまでの１か月半に，互いのテープを８本以上聴き，相互評価を行わせた。１回の貸し出しは１本。この学習に関しては，個々のテープへの評価（資料５）と，学習をふりかえるためのプリント「テープを聴き終えて」に，印象に残ったテープとその理由，楽しかったこと，たいへんだったこと，この学習から得たものについて記入させた。（資料６）

３ 生徒の実態

(1) 朗読テープの作成について

出来上がったテープは，それぞれに練習のあとが感じられるものであった。とくに，２分以上という設定にしたため，聴きやすい速度で読まれており，間のとり方なども工夫が出ていた。朗読台本と照らし合わせて聴くと，声の強弱，間のとり方は考えたとおりにできているものが多かったが，緩急については，台本で考えたものが読みに表れていないものもあった。また、台本でたくさんの工夫を考えたものの対応できていない例もみられた。

学習のまとめとして，選んだ作品とその理由，楽しかったこと，苦労したこと，この課題を終えて，の４項目について学習をふりかえらせた。（資料４）そこに書かれた意見、感想から、生徒の学習の様子を探ってみたい。

① 自分の読みの客観的な評価

当然のことだが，生徒にとっては，自分の読み方を客観的に聴く機会となる。適度だと思ったスピードが，聴いてみると速いと感じたり，自分の読み癖に気づいたりするなど，自己評価をする機会になった。以下の感想から，その様子がうかがえる。

- 「です」「また」というところを，「ですー」「またー」などとのばして読んでしまったり，「ざっかやの／みせさきに」などとたくさん切ってよんでしまったりするのを直すのが大変だった。でも，練習して直すことができたのでよかった。
- 自分ではゆっくり読んだつもりでも，実際テープを聴いてみると，速かったり間がなかったりして，思うようにいかなかった。

② 音読の効果の再発見

普段は黙読の機会の方が多いので，これを機に音読の持つ効果を改めて発見する生徒も多かった。

- 練習すればするほど，登場人物の気持ちが理解できてきたり，その場面場面がぱっと頭に浮かんできたりしておもしろかった。
- 何回も練習してたいへんだったけれど，文章の意味が声をだして読んでいるとわかってくるのでよかった。
- 「夏休みが終わらない島」の朗読の時には，その島の様子を想像しながら読むことができた。読むにつれて最初の印象に増してこの若者に共感した。
- この短い物語は何となく読んでしまうとすぐ終わってしまうけれど，このように朗読台本まで作って読んでみると，一つ一つの言葉の表現にとってもおもしろい意味がふくまれているんだなということがよくわかりました。読めば読むほどだんだん工夫することろが多くなって，時間をたくさんかけて練習できてよかったです。

黙読のときは一つ一つの言葉に注目せず読み流していることが多いが，声に出して読むことによって，また，何回も練習することによって，使われている言葉に注目していく様子がうかがえる。初め読んだときに気がつかなかったことも，声に出すことによって気がついたりするという，音読の効果を発見しているといえよう。

③ 朗読の工夫を楽しむ

読み方を変えると物語の感じが変わることのおもしろさを発見した生徒も多かった。

- 速く読んだり遅く読んだりで，全然感じが違うのでおもしろい。
- 読み方ひとつによって，その文章が少しでも変わっていくとわかった。
- 同じ文章でも，ちょっと読み方を変えると，雰囲気が違ってくるところが楽しかった。また，句読点が少ない文は，区切るところがむずかしかった。
- 気づいたことは，朗読台本を作るか作らないかではだいぶ違うということです。朗読台本を作って読んでみると，ものすごく感じが出てきます。

④ 朗読と内容理解の関連に気づく

この段階では，朗読が内容理解に結びつくことに気づいた感想はあまり多くなかった。これに関する感想は互いのテープを交換して聴いたときのほうが多い。

- 文章の内容を理解しなければ，人に伝える読み方ではできないと思った。
- 自分で速さ，強弱などをつけるのは思ったよりつらいことで，作者が何を伝えたいのか分からないとマークをつけるのが無理で，とても苦労しました。
- 苦労したことは，何よりも「2分をこえる」という厚い壁だったと思います。どれだけその話を大切に読むかによって，読む人にとっても聴く人にとってもその話が楽しい話かつまらないかが決まってしまうからです。じっくり，ゆっくり，伝えたい言葉を大切に読みました。

⑤　言葉そのものや言語生活への発展

- この学習で正しい日本語の美しさを改めて感じました。苦労したけれど，できあがったときの充実感を得た気がします。
- これからも人と会話をしたりするときに，言葉を一つ一つ大切にしたいです。
- 自分ではゆっくりすぎるのではという気持ちで読んでいたけれど，あとでテープを聞いてみると意外と聴きやすい速さだなと思いました。ふだん何かを相手に説明するときなども，ややゆっくりめの方が相手に伝わりやすいのではと思いました。
- ゆっくりきれいに話すということは，聞いていてとても気持ちのいいことだから，友達としゃべるときはともかくとして，他の時に使いたいです。

はじめの二つの感想に表れているように，この学習で言葉そのものに注意を払うようになった生徒もいる。またあとの二つの感想から分かるように，話し手から聞き手への立場に立ち，聞きやすさということに関心をもつ感想もみられた。朗読テープを作る学習からさらに発展的に学習をした例といえよう。

(2)　テープを交換しての相互評価について

ゆとりをもって計画的に借りる生徒は１０本～１３本聴くことができた。中には，クラス全員のを聴きたいと意欲的に２０本以上聴く生徒もいた。「○○さんのは上手だ」「○○君のは音楽が入っていておもしろい」といった評判が伝わると，貸し出しの希望が集中する。期間中は同じ学級内での貸し出しに限ったが，その後も継続して借りにきたり，他のクラスの生徒についても聴かせてほしいと借りていく生徒が見られた。

生徒がこの学習からどのようなことを学んだかを，感想の中からまとめていく。

①　読み方の違いの発見

同じ作品でも人によって読み方が違い，それにより，同じ物語でも違って受けとめられるということに，新鮮な驚きを感じる生徒が多かった。

- 同じ話でも読む人それぞれによって全く違う感じに聞こえるので，それも楽しかった。
- 同じ文章を読んでも，人それぞれで強調したいところや間の取り方が違うので，きっと感じたことも違うんだと思った。
- 声の大きさ，感情のこめ方によって，ずんぶん変わるものだと思った。
- 同じ文章でもいろんな読み方，表し方があるんだということがわかった。
- 人の朗読を聴くことによって，その人がどんなことに気をつけて読んでいるのか，物語に対してどんな気持ちなのかわかる。自分とどう読み方が違うのかとかも発見できた。
- 人それぞれの読み方で，工夫の仕方によって，同じ物語でもいろいろな感じで聴き取れた。
- 同じ文章，同じ箇所でも，いろいろな表現の仕方があること，要するに文章の広がりを感じた。
- 同じ話でも４０通りの読み方がある。ひとりひとりに個性があるということがわかった。
- 少し工夫するだけで，全体がかわることが分かりました。

これらは，朗読を聴くことより，人によって物語のとらえ方に違いがあることに気づいた感想である。理解と表現の結びつきを体験を通して理解したといえる。

② 相互交流

この学習では相互交流もねらいとしていたが，感想では，このことについて書いている生徒が最も多かった。

- たくさんのカセットを聞きましたが，本当に読むのがうまい人はいろいろな読み方を知っていて，読み方が豊かでした。私ももっとうまい人の読み方を聞いてうまくなりたいです。
- 自分と比較してみると，音の強弱，速く読むのと遅く読むのの違いなどがわかり，これからの朗読に大いに役立ちそうだった。
- 人のを聞くっていうのは，やっぱり自分の音読方法の参考になると思う。同じ文章でも，自分とは違うところがはっきりわかった。私は練習不足だったように思った。そのことがよくわかった。
- 間のとり方や声の大きさ，スピードの加減が，みんなのを聞いてわかった。
- 自分が工夫したところ，考えたところ，思ったところと違ったところをみんなが工夫していて，自分が考えたところ以外の工夫の仕方がわかった。
- いろんな読み方を知ることで，どういうふうに読んだら聞きやすいかがよくわかりました。

③ 言葉への新たな発見

朗読テープを作成したときも，言葉の大切さに気づいた生徒がいたが，聴く側に立って改めてこれを感じた生徒もいた。

- こんなに短い物語でも，ただなんとなく読むのと何回も練習して読むのとでは全然違うと思います。その一つ一つの言葉に気持ちがこもっているのが他の人のを聴いてよく分かりました。

6 実践の成果と今後の課題

単元のねらい①の，音声言語の楽しさを味わうことができるに関しては，1年次の「声を出そう」で重点的に扱ったが，授業の始めに声を出すこと，そして全員で声を合わせることを楽しんでいる様子がうかがえた。また，朗読発表会へと発展させることも，音読を楽しむために効果的であった。

単元のねらい②の，音読により，日本語の響きの美しさを感じ取ることができるに関しては，定型詩の暗唱を多く取り入れることによって努力した。古典作品で日本語の響きのよさやリズムを味わうことができるのはもちろんであるが，現代詩にもそれに適したものがたくさんある。しかし，教科書教材の詩は，どうしても理解学習に重点がおかれがちである。それが，この「声を出そう」によって，リズムや響きのよい詩に多く触れさせることができたように思う。今後の課題は，声に出して読むのにふさわしい教材の開発と，教科書教材との関連をどのように図るかにあると思う。無理のない形でこの学習を継続させ，生徒に音読を楽しませながら日本語の美しさを感じ取らせていきたい。

単元のねらい③の朗読テープをつくるという学習については，生徒にとって初めての経験であり，また，友達のテープを聴くというおもしろさもあり，興味・関心をもって学習に取り組ませることができた。読み手と聞き手の両方の立場に立つことにより，朗読の工夫や内容理解との関連について，多くのことを学びとらせることができた。夏休みから2学期にかけての学習であったが，これをもとに，今後の理解学習の中にも，朗読を効果的に取り入れる学習を組み入れていく必要がある。その際，この学習における各自の成果をより確かなものにするよう，学習相互の関連を図ることが大切だと思われる。

これらの指導もとに，音読・朗読に関しての年間計画を立てていくことも今後の課題としたい。

（資料１）

（声を出そう　1）

であるとあるで

であるはであるでなかろうか
であるがでないであるならば
でないはであるになるだろう
でないがであるでないならば
であるはでないでなかろうし
でないであろうがなかろうが
であるはであるであるだろう

あるではあるでであろうかなか
あであるがでであないあなばるら
いなはであるにであるだろな
ないでがであるあでいなばら
はあるでなでいでなろうしか
いなでであがろうかながろう
であるはあであるあであだろうる

（資料２）

（声を出そう　23）

われは草なり

われは草なり
伸びんとす
伸びられるとき
伸びんとす
伸びられぬ日は
伸びぬなり
伸びられる日は
伸びるなり

われは草なり
緑なり
全身すべて
緑なり
毎年かはらず
緑なり
緑のおのれに
あきぬなり

われは草なり
緑なり
緑の深きを
願ふなり

ああ　生きる日の
美しき
ああ　生きる日の
楽しさよ
われは草なり
生きんとす
草のいのちを
生きんとす

高見　順

（資料３）

（声を出そう 17）

宝島

間…下まは

強く

ゆっくり

弱く

山の礼

「腕時計の中には、宝石が入っているんだよ。小さいけれど、ほんものの宝石が、たくさん入っているんだ」ときいたとき、小さな男の子は胸をときめかせました。ちっぽけな時計の中に、十個以上ものサファイアやルビーが入っているというのです。それは、まるで宝島をひとつ見つけたようなものでした。

あるとき、父親から使いものにならなくなった腕時計をもらうと、男の子は大よろこびで時計を分解しました。

宝島はどこだろう。

サファイアやルビーは、どこにかくしてあるのだろう。

丸二日かかって、時計をすっかりばらばらにした男の子は、とうとう見つけたのです。ピンセットでつまみあげるのがやっとの、小さな宝石……。

でも、それはまぎれもなく、青いケシつぶのようなサファイアと、夕やけのしずくをくだいたようなルビーでした。

「ドロボーが入ってきたら、盗まれてしまう」心配した男の子は、やっと見つけた宝ものを、秘密の場所にかくしておきました。

男の子の秘密の場所は、三つの鏡でできている、万華鏡の中だったのです。万華鏡をのぞくと、宝ものは、見つけたときの数倍になって、きらきらと光りました。

小さな男の子は、誰にも見つからない、気づかれることもない、すてきな宝島をひとつ、手に入れたのでした。

2分06秒

（声を出そう 18）

かいじゅうのたまご

塩見泰

ゆっくり

大きく強く

□の言葉に気をつける

つなげて読む

雑貨屋の店さきに、バスケットに盛ったたまごがひと山おいて売りました。ニワトリのたまごより大きくて、アヒルのたまごよりは小さいみどりいろのたまごです。

「ほんものの、かいじゅうのたまご。かならず、かえります。ひとつ五十円」

と書いた札が、たまごの真ん中に立ててありました。

子どもが大勢やってくる雑貨屋にふさわしい、おもしろい思いつきだと感心して、かいじゅうのたまごを三つ買いました。

ひとつはうちの、三つになる男の子に、あとのふたつはおとなりの、ふたつになったばかりのふたごに、おみやげにしたのです。

三人の子どもたちはよろこんで、かいじゅうのたまごをもらってくれました。

それから十日すぎて、たまごは割れ、中からみどりいろの小さなかいじゅうが出てきました。子どもたちは大よろこびで、かいじゅうに食べさせる木の葉をとりに行きましたが、たまごを買ってきた父親は腕組みをして、かいじゅうがこのまま育って、大人になってしまったらどうなるのだろうかと、考えています。

かかった時間
2分10秒

（資料４）

朗読に取り組んで

1組28番（梶井裕紀）

☆選んだ作品

1 アイロン伝説（2分32秒）

2 なくしたもの（2分15秒）

☆選んだ理由

1 どこの家でもあるアイロンは魔ものが友わったものなんてストーリがおもしろいし緩急もつけられそうだったから。

2 最後部分をよんだ時なんだか祖父母の家のまわりにたくさんいるホタルがうかんできてこの季節にぴったりと思ったから。

☆楽しかったこと　苦労したこと

自分で読んでみながら印をいれていったけれども、いざ読むとなったら印通りに読めなくて何回も失敗してしまいました。でも聞いてみると心で失敗したと思っていた所が意外とうまく聞こえてたりしておもしろかったです。

☆この課題を終えて

この短い物語はなんとなく読んでしまうとすぐ終ってしまうけれど、このように朗読台本まで作って読んでみると一つ一つの書いてある言葉の表現にとってもおもしろい意味がふくまれているんだなということがよくわかりました。テープにふきこんでみたのは初めてだったのでとっても楽しく自分流に読めるのがおもしろいなと思います。でも、意外と読めば読むほどだんだん上手するところが多くなって時間をたくさんかけて練習できてよかったです。

朗読に取り組んで

3組11番（高嶋諒）

☆選んだ作品

1 なくしたもの（2分3秒）

2 夏休みが終わらない島（2分8秒）

☆選んだ理由

1 ホタルが姿を変えた男の子の様子が強く心に残ったから。

2 なんとなく共感できる部分があった。

☆楽しかったこと　苦労したこと

。録音中に、飼っている犬が何度か吠えてしまう時があった。

☆この課題を終えて

「夏休みが終わらない島」の朗読の時には、その島の様子を想像しながら読むことができた。読むにつれて、最初の印象に増してこの若者に共感した。

1年 3組 33番 氏名 菅井 沙知

	/	氏名	題名	ここがよかった　もっとこうしたほうがよかった
1	9/7	斉藤倫明	イイロン伝説	ゆっくりとした口調で とても聞きとりやすかったです。
			かいじゅうたちゴ	お父さんの気持ちを よく表している読み方が印象的でした。
2	9/8	増田杏菜	はと時計	間のおき方が上手で ていねいに読んでいました。
			海からのおくりもの	男の子の気持ちを うまく声にして 表していると思いました。
3	9/10	坂本沙里	記念写真	しっかりとした声で 強弱もはっきりしていました。
			なくしたもの	最後の間が ちょうどいい長さで じーんとくるようでした。
4	9/12	高橋萌	たんぽぽ入りのおむれつ	同じものを 朗読したけれど ほのぼのが 高橋君にぴったりです。
			消しゴム	静かに読む感じが、物語とぴったりで 高橋さんらしさも表していました。
5	9/18	高橋良明	記念撮影	ネコの かわいらしい姿が思い浮かぶような 洗練された読みでした。
			無人島へもっていくもの	子供達のそれぞれの セリフが 1つ1つ 違いが出ていて 上手でした。
6	9/24	鈴木奈奈	はとどけい	はきはきとした口調が 気持ちよく耳に入る読み方が 良かったです。
			夏休みのおわらない島	練習した成果がにじみでていると思いました。
7	9/30	水津佳菜子	たんぽぽ入りのおむれつ	うさぎのおじさんの セリフが うまくて お気に入りの1つです。
			なくしたもの	聞きやすく、やさしい感じで 読めているので 感心しました。
8	10/2	伊奈伸吾	のいちごの酒	ねずみのセリフや娘の行動が分かりやすい読みなので 良かったです。
			夏休みの終わらない島	読みにくくて 分かりにくいところを ちゃんとクリアできていました。
9	10/9	佐藤翔	ねむりの国へ	数を数えるところが 不自然にならないところがいいと思いました。
			海の星	全体的に感情が 込もっていて きちんと 読みこなしていました。
10	10/14	上野佳菜	無人島へもっていくもの	すごく感じがでていて ゆっくりと読んでいたので 良かったと思います。
			宝島	しみじみとした感じがでていて 間がよくとれていた。

（5 巻末）

（資料 6）

テープを聴き終えて

3組 29番 （坂本沙里）

1 聴いた数
（13）本

2 印象に残ったテープ
名前（矢野裕之）
理由―ここを自分はしっかり読みたい、というところをすごく強く読んでいた。強さにすごく工夫していてびっくりしました。

名前（小刺敦子）
理由―特に間のあけ方がすごくよかった。一つ一つの読み方もあわてていなくて、じっくり読んでいた！ good!!
一語一語を大切に読んでいた。

3 楽しかったこと
一人一人の「詩」に対する考えがテープを聴いていてよくわかった。それにそれぞれの人がどんな詩をどのように読んでいるのかきくのが楽しかった。そして、私にかたりかけているように読んでいるのをきくのも楽しかった。
その人がそばにいるようで……

4 たいへんだったこと
聴き終わって、その人がどのように読んだのかを、感想にして書く時、どのようにあらわしたらいいのかまよった。
読むのがはやすぎて、あまりよく聴きとれない時もあった。

5 この学習から得たもの
人の朗読を聴くことによって、その人がどんなことに気をつけて読んでいるのか、詩に対してどんな気持ちなのかわかる。
自分とどう読み方がちがうのかとかも発見できた。
人それぞれの読み方で、工夫の仕方によって、同じ詩でもいろいろな感じ方で聴きとれた。

テープを聴き終えて

3組 36番 （露木智美）

1 聴いた数
（11）本

2 印象に残ったテープ
名前（小刺敦子）
理由―すごくはっきり読んでいて、とても聞きやすかった。
あとがくれんぼだってさくる男の子、悲しい気持ちがよくわかった。

名前（坂本沙里）
理由―工夫してある所がたくさんあった。（手どった白いはことか、あと、この中、ナレーターのちがいまよっていた。それから、とても、調子がよくて、聞きやすかったです。）

3 楽しかったこと
人それぞれ、いろんな工夫をしていて、（とくに自分がやったりだとよくわかった）それをみつけるのが楽しかった。それと、自分以外のテープを聞くことでこれから私もこんな読み方をしたいと考えられてよかったと思う。

4 たいへんだったこと
ついテープを聞くのを忘れたりして、ずいぶん日にちをあけてしまったりした。

5 この学習から得たもの
同じ文章を読んでも、人それぞれで、強調したい所や、弱く読みたいところ、それから、間のとり方がちがうので、きっと、感じたこともちがうんだと思った。